

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：34301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02386

研究課題名（和文）説話の生成に関する研究 - 貴族・寺院社会における記録の作成・管理との関連を中心に -

研究課題名（英文）Research on the generation of Setsuwa literature : Focusing on the relationship with the creation and management of records in aristocratic and temple societies

研究代表者

佐藤 愛弓 (sato, ayumi)

大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：50460655

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：説話文学は通常『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』のような説話集に所収されている状態で鑑賞され、文学史に位置づけられている。しかし説話集に収められる前の説話について考えるならば、説話は、貴族社会や寺院社会の記録に付属する口伝や先例である。本研究ではこのことを重視し、説話集に入る以前の説話を観察することができる寺院資料を調査しつつ、個々の説話の生成過程についての研究を遂行した。その結果、社会集団の中での説話の機能について考察を深めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世の貴族・寺院社会において説話は独立して存在した訳ではなく、日記・儀式書・聞書・言談の中に生成するものであった。本研究は、貴族・寺院社会における資料群の中で、説話の生成・変遷・保管がどのように行われたのか、体系的かつ実証的に考察しようとするものである。勸修寺・東寺などひとつの体系的性を保った資料群（文庫）の全体構造を把握し、そのなかでの説話がおかれた位置（位相）を提示し、具体的な説話を挙げて、その生成過程を社会との関係において考察し、それぞれにおいて明らかになった実証事例を体系化・論理化することで、説話の生成過程を考えるというものであり、研究の進展に大きな意義を持つものであった。

研究成果の概要（英文）：Setsuwa literature is usually appreciated as contained in collections of tales such as Konjaku Monogatari Shu and Uji shui Monogatari, and is considered part of literary history. However, if we consider the tales before they were collected in collections of Setsuwa literature, they are oral traditions or precedents attached to the records of aristocratic or temple societies. In this study, we focused on this fact and conducted research on the generation process of individual Setsuwa tales while surveying temple materials that allow us to observe Tales before they were included in collections of Setsuwa literature. As a result, we were able to examine the function of the Setsuwa tales within the social group.

研究分野：日本文学

キーワード：説話 寺院資料調査 文庫

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

説話文学というと『宇治拾遺物語』や『今昔物語集』のように、説話集に収載された形がよく知られている。だからこそ説話研究は、その出発点においては、説話集の作品論が中心であった。しかし次第に(1990年代からは特に顕著に)寺院資料調査などが進み、新資料の発見などが相次いで、説話集に収められる前の説話に注目が集まるようになった。寺院などの文庫の資料群には、説話集に収載される前の説話の姿が多く観察できるからである。現在に至るまで各地で資料調査は隆盛をきわめ、大きな成果をもたらしたが、新資料発見報告などの情報量の多さにその整理や論理化が追いつかず、結果としてのかつての説話集研究との接続が難しくなっていた。そこで本研究では、着実な寺院資料調査を基盤としながらも、個々の説話の生成環境についても検証を進め、これらを連動させることによっていったい説話とは、貴族社会、寺院社会において、どのように生成され、どのように利用され、どのように伝えられていったものなのか、考察することとした。

### 2. 研究の目的

中世の貴族・寺院社会において説話は独立して存在した訳ではなく、日記・儀式書・聞書・言談など多様な資料群の中に生成するものであった。本研究では、貴族・寺院社会における資料群の中で、説話の生成・変遷・保管がどのように行われたのか、体系的かつ実証的に考察しようとするもので、具体的には以下の三つの目的を持つ。

- 1). 勸修寺・東寺などひとつの体系的な資料群(文庫)の全体構造を把握し、そのなかでの説話がおかれた位置(位相)を提示する。
- 2). 具体的なテーマの説話を挙げて、その生成過程を、それを育んだ社会との関係において考察する。
- 3). 1)と2)において、明らかになった実証事例を体系化・論理化することで、説話の生成・変遷・管理の過程に関する体系的なモデルを提示する。

### 3. 研究の方法

「研究の目的」に示した三つの目的に対応して、それぞれ以下のような方法で研究を進めることとする。

- 1). 寺院資料調査 本研究の基盤となるのが、寺院資料調査の遂行である。悉皆調査の成果からは、その文庫の構造を知ることができるが、その構造からは、それを保持した社会集団がその資料をどのように生成し、利用してきたか、読み取ることができる。本研究では、悉皆目録の作成を進行させつつ、資料群の構造を分析することによって、これを所持・管理した社会集団にとって、それぞれの資料にどのような意味があり、そこに含まれる説話にどのような機能があつたのか、考察する。
- 2). 説話とそれを生成した社会集団との関係を分析する上で、ふさわしい説話群をリストアップして、具体的な説話生成のシステムについて考察を行う。
- 3). 1)と2)を統合することにより、説話とは何かを追求する。

### 4. 研究成果

研究成果についても、「研究目的」で挙げた三点と対応させつつ述べることとする。

- 1). 寺院資料調査は、調査対象の数が膨大であるため、さらに継続的に調査を進めねばならないが、勸修寺資料については一通りの全点調査が終わり、暫定的な悉皆目録が完成した。さらに点検を重ねて精度を上げる必要はあるものの、全体像がわかる目録が完成したことは研究の進展に大きく寄与するものである。
- 2). また、説話とそれを育む社会集団との関係を考える上で有益な説話を挙げ、説話の生成と機能についての考察を進めたが、それらは以下のような論文として結実した。

2016年『真言伝』の神仏習合- 山中で出会う美女 - 』(『説話の中の僧たち』(新典社選書) 125-160頁)

2017年「学僧たちの説話 三修魔往生譚について」(『山邊道』第57号、1-33頁)

2018年「験者の肖像 余慶とその弟子たち」(『山邊道』第58号、45-77頁)

2019年「比叡山内論義と大衆」(『唱導文学研究』第12集、15-37頁)

2021年「『扶桑略記』の史的意義」(『扶桑略記の研究』(新典社選書) 87-132頁)

2021年「『扶桑略記』の他国観 隋、唐、宋の記事を中心として」(『文藝論叢』第98号 22-43頁)

このうち ~ は個別の説話を挙げて、それを生成した社会集団とその思想との関係を論じたものであり、なぜそのような説話が伝えられ、どのように説話が機能したのかを、あきらかにすることができた。 ~ は『扶桑略記』という膨大な資料を利用して編纂された歴史書の性格

と、その編纂を可能にした文庫という環境について考察したもので、編纂物の中にある説話の機能について研究を進めた。 、 の論文により、単独の説話と文庫との関係から、文庫を舞台とした編纂物の編纂へと視野をひろげることとなった。

3). 1)2)の統合的な論理モデルについても、2)で挙げた論文の執筆を通じて一定の成果を得ることができた。調査を遂行している寺院資料も、その中にある説話も、極めて数が多いため、一部を通じてみえてきた論理モデルが全体に汎用できるか、さらに検証を進めねばならないが、今後の研究の進展に着実に寄与するものと思われる。また、その点においても、 、 において、「編纂物生成の場としての文庫」という新たな視点を獲得した意義は大きい。このような研究の進展の先にこそ、過去の説話集研究との接続が可能であると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 佐藤愛弓	4. 巻 -
2. 論文標題 『扶桑略記』の史的意義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 扶桑略記の研究	6. 最初と最後の頁 87-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤愛弓	4. 巻 98
2. 論文標題 『扶桑略記』の他国観 隋、唐、宋の記事を中心として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文藝論叢	6. 最初と最後の頁 22-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤愛弓	4. 巻 12
2. 論文標題 比叡山内論義と大衆	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 唱導文学研究	6. 最初と最後の頁 15-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤愛弓	4. 巻 58
2. 論文標題 験者の肖像－余慶とその弟子たち－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山邊道	6. 最初と最後の頁 45-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤愛弓	4. 巻 -
2. 論文標題 『真言伝』における神仏習合 山中で出会う美女	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 説話の中の僧たち（新典社選書）	6. 最初と最後の頁 125-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤愛弓	4. 巻 57
2. 論文標題 学僧たちの説話	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 山邊道	6. 最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

#### 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

#### 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

#### 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------